様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：２３７０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５９３２２３

研究課題名（和文）慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」と看護のあり方を基盤とした看護理論の構築

研究課題名（英文）Development of nursing theory based on "difficulties in telling" in chronic illness

研究代表者
黒江　ゆり子（KUROE, YURIKO）

岐阜県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：４０２９５７１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：慢性の病いを持つ人々へのインタビューから描き出されたライフストーリーを基盤とした慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」の特性について、H.S.Kimの理論構築に基づき導出・洞察・記述するとともに（クライアント領域）、慢性の病いにおいてケアを提供している看護職者へのインタビューから導かれた「言いづらさ」への対応における‘感知’と‘配慮’の特性を導出・洞察・記述し（クライアントーナース領域）、これらから看護の在り方についての思考を深化させ、‘実践領域モデル案’（実践領域）を創生した。これにより、慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」を基盤とした理論構築の基礎を構築した。

研究成果の概要（英文）：We drew the life stories from interviewing the persons living with chronic illness. Then we got characteristics of “difficulties in telling” to others in living with chronic illness based on each life stories, and described them (the Client domain), and we interviewed the nurses who care to the person living with chronic illness about experiences of “difficulties in telling” to others of the patient and described the characteristic of ‘recognition’ and ‘caring’ (the Client-Nurse domain). According to them, we considered the method of nursing and created ‘the nursing practice model’ (the domain of Practice). What underlies these is the way of theoretical construction by H.S.Kim, We, as mentioned above, built the basis of the development of the theory based on the “difficulties in telling” in living with chronic illness.

研究分野：看護学・基礎看護学

キーワード：言いづらさ　クロニックイルネス　ライフストーリーインタビュー　クライアント領域　クライアント-ナース領域　実践領域　アーキタイプ　看護理論構築

１．研究開始当初の背景

慢性状況における病気の捉え方については、A.ストラウスとJ.コービンらが1984年に病気の慢性状況の特性をクロニシティ（慢性性）として説明し（南裕子監訳：慢性疾患を生きる、医学書院、1987)、1988年にはA.クラインマンが経験としての病気の考え方を発表した（江口他訳：病いの語り、誠信書房、1998)。これらはわが国においても慢性領域の研究者および実践者に大きな影響を与えた。その後、ストラウスとコービンがクロニシティの概念を一層発展させ、患者と家族のインタビューから導き出した「病みの軌跡」の考え方を1992年に紹介し、個人史の重要性を指摘した（黒江他訳：慢性疾患の病みの軌跡、医学書院、1995)。また、1980年代後半から慢性状況に関する研究を続けているI.ラブキンとP.ラーソンは、ストラウスらの考え方を受けて、生活に与える影響をクロニックイルネスの衝撃としてとらえ、生活の中の具体的な衝撃について提示している（黒江他訳：クロニックイルネス－人と病いの新たなかかわり－、医学書院、2007)。

また、わが国においては、1984年に得永が自分の体験を基盤に、慢性の病いが生活にどのような影響を与えるのかを著わし（得永幸子：「病い」の存在論、知湧社、1984)、2000年には田中が精神障害・当事者にとっての病いの意味について報告し（田中美恵子、ある精神障害・当事者にとっての病いの意味、「聖路加看護学会誌、4(1)、1-19，2000」、2003年には秋山らが、慢性の病気への対処行動に関する研究として、対象者の生活史をライフヒストリー法により描き出している（秋山智也：地域生活を送る脊髄小脳変性症A氏の病気への対処行動に関する研究、日本難病看護学会誌、8（2)、125-133、2003)。

申請者らは、糖尿病をもつ人々を対象にした先行研究（黒江：女性の１型糖尿病における食行動異常に関する研究、平成１１年度～１３年度、科学研究費補助金、研究課題番号11672400において研究協力者から語られた内容から、医療職者を含め、社会の人々による病気に対する反応に苦慮したことが多く含まれていることを指摘した。これらは報告書で報告すると同時に、誌面にても論議した（看護研究35巻4号、焦点：慢性性chronicityと生活しに焦点をあてた看護学研究)。その後、慢性の病気をもつ病みの軌跡を調べる中で、生活および生活史についての的確な視点をもつことによって、今まで明らかにされてこなかった「病気のある生活」を知ることができることに気づかされた。その後、萌芽研究（黒江：慢性の病いにおける他者への言いづらさについての研究、平成17～19年度科学研究費補助金、研究課題番号17659674）において、ライフストーリーの視点で生活を考える立場を追求し、病いとともにある生活とその生活を営む主体としての「生活者」を捉えることの重要性を示唆するとともに（黒江他：看護学における「生活者」という視点についての省察、看護研究、39(5)、3-9、2006)、病いの慢性性についてわが国でどのように考えることができるか看護学的に省察した（病いのクロニシティと生きることについての看護学的省察、日本慢性看護学会誌１(1)、3-9，2007)。

平成20年からは基盤研究(C)(黒江：慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」と看護のあり方についての研究、平成20～23年度科学研究費補助金、研究課題番号20592503)において、慢性の病いとともにある人々のライフストーリーを描き、それらのストーリーには「言いづらさ」について、言えないことの文脈、日常への反映、傷ついた体験、生活の中でいつしか生まれる変化、底流にあるもの等が包摂されていること、および慢性の病気自体が理解しがたく“他者に伝える言葉が見つからない”、あるいは病気について話すことで心配や迷惑をかけると思う“他者への気遣い”、他者に言うこと/言わないことでの“傷ついた体験”などが「言いづらさ」に繋がっていることを示し（慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」と看護のあり方についての研究、研究成果中間報告書、平成22年3月)、これらの内容については報告とともに論議した（黒江他:第4回日本慢性看護学会学術集会交流会、2010）（黒江他：慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」－ライフストーリーインタビューは何を描き出すか－、看護研究、44(3)、2011)。さらに、慢性の病いにおける「言いづらさ」について看護職者のストーリーを描き、看護職者は人々の「言いづらさ」をその生活の中でとらえ、社会的立場、家族背景、および生きることの意味を踏まえてケアを提供していることが考えられ、そこには慢性の病いとともに生きる人々の「言いづらさ」とケア提供者による「聴きづらさ」が同時に存在していることを報告した（黒江他：第5回日本慢性看護学会学術集会交流会、2011)。これらの研究を基盤に発展的に思考し、H.S.キムを含む看護研究者・看護実践者との相互交流を通して病いのある生活と看護を「言いづらさ」の視点から描き出し、看護理論の基盤構築をすすめた。

２．研究の目的

(1)慢性の病いをもつ人々へのインタビューから描き出された個々のライフストーリーから慢性の病いにおける「言いづらさ」の特性を導き、病いのある生活において人々がどのような「言いづらさ」を経験しているか洞察する。その内容をふまえ、H.S.キムらによるクライアント領域の特性を論述する。

(2)慢性の病いをもつ人々にケアを提供している看護職者へのインタビューより描き出されたストーリーから、慢性の病いにおける「言いづらさ」に対する看護職者の対応の特性を導き、看護職者が人々の「言いづらさ」をどのようにとらえ、どのような看護ケアを

提供しているかを洞察する。その内容をふまえ、H.S.キムらによるクライエント－ナース領域および実践領域の特性を論述する。
(3)上記より導き出された特性、および H.S.キムらによるクライアント領域、クライアント－ナース領域、および実践領域についての洞察をふまえ、洞察内容を基盤に看護研究者・看護実践者によるディスカッションを行い、慢性の病いにおける人間/生活者の捉え方、人が人を支えるときの関係のあり方について看護学的にそれぞれの特性を導き、看護実践のあり方を追求し、慢性の病いにおける看護理論の理論的構想を構築する。

慢性の病いのある生活とその生活者を支える看護がわが国においてどのような特性を持っているかについて、クライアント領域、クライアント－ナース領域、および実践領域の洞察をふまえ、看護学的に明らかにすることは、その生活を営む人々を援助する看護学において極めて重要であると考える。また、本研究は、慢性の病いにおける「生活者」の視野を包摂し、そこから慢性の病いにおける看護理論の発展に向けて、理論的構想を構築することを目指すという独自の方向性を有している。

３．研究の方法

(1)慢性の病いをもつ人々へのインタビューから描き出された個々のライフストーリーから慢性の病いにおける「言いづらさ」の特性を導き、病いのある生活において人々がどのような「言いづらさ」を経験しているかを洞察する。その内容をふまえ、H.S.キムによるクライアント領域（本質的・課題的・ヘルスケア経験的概念等）の特性を検討し、論述する。
(2)慢性の病いをもつ人々にケアを提供している看護職者へのインタビューより描き出された看護職者のストーリーから、慢性の病いにおける「言いづらさ」に対する看護職者の対応の特性を導き、看護職者が病いのある生活における人々の「言いづらさ」に対する看護職者の対応の特性を導き、看護職者が病いのある生活における人々の「言いづらさ」に対する看護職者の対応の特性を導き、看護職者が病いのある生活における人々の「言いづらさ」をどのようにとらえ、どのような看護ケアを提供しているかを洞察する。その内容をふまえ、H.S.キムによるクライアントナース領域（接触・コミュニケーション・相互作用）および実践領域（看護熟考・看護実現）の特性を論述する。
(3)上記により導き出された特性、および HS.キムによるクライアント領域、クライアント－ナース領域、実践領域および環境についての洞察をふまえ、有識者（看護研究者・看護実践者）を含めたディスカッションを行う。慢性の病いにおける人間/生活者の捉え方、人が人を支えるときの関係等について看護学的にそれぞれの特性を導き、看護実践のあり方を追求し、慢性の病いにおける看護理論の理論的構想を構築する。

４．研究成果

慢性の病いとともにある人々へのインタビュー及び慢性の病いにおけるケアを提供している看護職者へのインタビュー内容から導かれた特性をふまえ、H.S.キムらの理論構築の考え方に基づき、慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」に関して洞察された「クライアント領域」「クライアント－ナース領域」の特性を論述し、また「実践領域」の知見から実践領域モデル案を創生し、看護理論の理論的構想の基礎を構築した。

［24 年度］

慢性の病いを持つ人々へのインタビューから描き出された個々のライフストーリーを基盤に慢性の病いにおける「言いづらさ」の特性を導くため、病いのある生活において人々がどのような「言いづらさ」を経験しているかに関するクライアント領域の特性について洞察を深め記述した。第一に、R.アトキンソンによる「私たちの中にある物語：人生のストーリーを書く意義と方法」の訳者である塚田守氏を招いてセミナーを開催し、慢性の病いにおける「言いづらさ」が‘他者に伝える言葉が見出せない’、‘他者の戸惑いへの気遣い’、‘他者との気まずさを避ける’等から生じていること、しかしながら‘「わかる」人との出会い’あるいは‘言う人と言わない人に一線を引く’ことにより、いつしか変化が生まれ、‘言わずに済むなら言わない’から‘自然に伝える’ことに繋がる等について論議した。これらの「言いづらさ」のストーリーには、回復の語り・混沌の語り・探求の語りがそれぞれのかたちで現れていることを含め意見交流を行った。

第二に、米国南メイン州立大学より R.アトキンソン氏を招聘し、ライフストーリーインタビューについての 2 日間のセミナーを開催した。人間は語ることによって生き方を変化させる可能性をもっていること、また、人間が共通に経験する主要な要素としてのアーキタイプ（archetype）およびモチーフ（motif）について意見交流を行い、病いとともに生きることに包摂される「言いづらさ」は文化によって異なり、文化に伴うクライアント領域の考え方について、H.S.Kim による「看護学における理論思考の本質」の抄読会を継続した。これらの洞察にもとづき慢性の病いにおける「言いづらさ」の立ち現れた特性(クライアント領域)について一部論述を行った。

［25 年度］

慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」と看護のあり方を基盤とした看護理論の構築を目指して研究をすすめた。第一に、看護理論におけるクライアント－ナース領域の考え方について、H.S.Kim による「看護学における理論思考の本質」の抄読会を継続し、クライアント－ナース領域および実践領域

について考察を深めた。同時に、P.L.チン&K.C.アーバントによる「看護における理論構築の方法」を含めて思索を続けた。

第二に、慢性の病いにおける「言いづらさ」の概念を論述するための準備として、上記「看護における理論構築の方法」の訳者である中木高夫氏（天理医療大学教授）を招聘し、看護理論構築における概念統合・概念導出・概念分析についてのセミナーを開催した。概念統合・概念導出・概念分析についての理解を踏まえ、「言いづらさ」の概念をどのように論述するかについてディスカッションを行った。資料として、「言いづらさ」についてのライフストーリーから導いた“「言いづらさ」の立ち現れ“を論述した文書を用いた。立ち現れている「言いづらさ」について、その先行要件および帰結を提示することの可能性が見出された。

第三に、看護理論におけるクライアント－ナース領域および実践領域の理解を踏まえ、「言いづらさ」が存在する中でケアを提供している看護職が、慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」をどのように感じ・考えているかの意見交流を目的に“慢性の病いにおける言いづらさの「概念」に関する看護実践者会議”を開催した。資料として、第二の会議で見出された「言いづらさ」についての立ち現れ、先行要件および帰結を論述した文書を用いた。

［26 年度］

慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」と看護のあり方を基盤とした理論構築を目指して研究をすすめた。第一に、慢性の病いにおける言いづらさの概念について一層の明確化を試み、「言いづらさを伴う体験」として、『本人の認識にかかわらず、「言わない」「言えない」「言いたくない」などの「言う」ことに抵抗や苦痛が生じていたと思われる体験』と定義づけた。同時に「言いづらさを伴う体験」に関する「先行要件（antecedents)」と「帰結(consequences)」を抽出した。さらに、日本の文学作品を題材に「言いづらさを伴う体験」が論述されている内容を読み取り、先行要件と帰結を抽出し、考察を深めた。

第二に、慢性の病いにおけるライフストーリーから導かれた「言いづらさを伴う体験」「先行要件」「帰結」を論述し、看護理論構築に関する有識者である H.S.キム博士と米国で会議をもち、「言いづらさ」を基盤とした看護理論構築について検討した。第三に、慢性の病いの言いづらさにおける看護実践について検討を深めるため、慢性状況における看護実践について豊富な経験を有する看護職者による看護実践者会議を開催し、専門職者としてどのように対応することが可能であるかについてグループ討議を行った。慢性の病いとともにある人々の語りを聴く機会に気づくことができれば、その機会は看護状況の中で多様に存在していること、看護職である自分たちの姿勢が整っていれば、人々の語りを聴くことは困難はないこと等の意見が得られた。

［27 年度］

平成 24 年から H.S.キムらの理論構築の考え方に基づき、慢性の病いにおける「言いづらさ」を基盤とした理論構築の構成要素として「クライアント領域」「クライアント－ナース領域」「実践領域」の特性を論述し、2014・2015 年の H.S.キム博士との議論を踏まえ、「言いづらさ」の事象の先行要件と帰結および時間軸を含めた論述に深化させた。また、「慢性の病いにおける「言いづらさ」を伴う体験を、『本人の認識にかかわらず、「言わない」「言えない」「言いたくない」などの「言う」ことに抵抗や苦痛が生じていたと思われる体験』と定義し、日本文化の中で「言いづらさ」がどのように在るかについて文学書を繙き、私たちは古来より他者に配慮をすることによって「言いづらさ」を抱え、大切な人を守ろうとし、言う人と言わない人を思考的感情的に自ら決めて生きていることを著した。

さらに「クライアント－ナース領域」に関して、看護職者のストーリー及び有識者会議から看護職者は対象者の「言いづらさ」を内的葛藤として認識し、ケアを提供していること、看護職者は実践において「言いづらさ」・「聴きづらさ」の事象を数多く経験していることが示された。さらに看護職者は対象者の「言いづらさ」と自らの「聴きづらさ」に気づく必要があり、看護職者に対象者の語りを聴く姿勢があれば、人は言いづらさから解き放たれ、多くのことを語ることができ、他者にも伝えることの意味が深まり可能性が拓かれることが示唆された。有識者会議を重ねて開催し、会議において示唆された内容から慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」を基盤とした実践領域モデル案(下記)を創生し、看護理論の理論的構想を構築した。

○慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」を包摂した「実践領域モデル案」

フェーズ a：慢性の病いの特性について知り、これまで培ってきた自らの認識を確認する。

病いの慢性性/クロニシティ（chronicity）について、病気に伴う個人・家族の長い個人史や生活者としての特性等を知るとともに、病いの慢性性に関する自らの認識に気づく。

フェーズ b：慢性の病いにおける「言いづらさ」と「聴きづらさ」に気づき、‘語りを聴く’姿勢を整える。

慢性の病いとともに生活している人々の他者への「言いづらさ」と、ケアを提供している看護職者の「聴きづらさ」を知り、人の語りを聴く姿勢を整える。自己の‘語りを聴く’姿勢に気づき、あり方を考える。

フェーズ c：慢性の病いとともに生活する人々の語りを聴く時と場を日々のケアの中

に取り入れる。
・個人・家族が語りたいことを語れるように時と場を整え、語りに耳を傾ける。また、それぞれに語られた内容に目を向け、どのような個人史及び生活・生活史が包摂されているかを考える。
・個人・家族に「言いづらさ」が感じられる時には、直接的なケア等を通して「大切にされている」という想いを抱くことができるように配慮する。また、個人・家族が‘理解の難しい病気’と捉えていることがあるので、それらの想いを含めて語れるように支える。
　フェーズｄ：慢性の病いにおける「言いづらさ」を踏まえて、自らの健康生活を考えることができるように支援する。
・信頼して語ることのできる関係が整えられると、人は多くを語り、これからのことを自ら考えることが多いことから、個人・家族が自らの思いに気づき、思いに沿って慢性の病いのある生活を創ることができるように支える。
・個人・家族が「言いづらさ」を抱いている場合は、他者に言わないことの罪悪感を解き放ち、言いづらさの軌跡を伝え、言う人と言わない人を自ら決めることの大切さを伝えながら、自らの健康生活を考えることができるように支える。
　フェーズ ｅ：看護実践における上記の取り組みについて、看護職者相互に意見交換し、振り返りを行なう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　10　件）
①黒江ゆり子、藤澤まこと、慢性の病いにおける事例研究法とライフストーリーインタビュー法の意義と方法についての論考、岐阜県立看護大学紀要、第 16 巻 1 号、105-111、2016.
②森谷利香、視神経脊髄炎患者の病いについての他者への言いづらさ、日本難病看護学会誌、第 20 巻 3 号、215-222、2016.
③黒江ゆり子、藤澤まこと、慢性の病いにおける言いづらさの概念についての論考－ライフストーリーインタビューから導かれた先行要件と帰結－、岐阜県立看護大学紀要、第 15 巻 1 号、115-121、2015.
④黒江ゆり子、長軸的コントロールを支援する知と技～“語り”と“生きる方策の発見”について考える～、日本糖尿病教育・看護学会誌、第 19 巻 1 号、33-37、2015.
⑤内田雅子、伊波早苗、小長谷百絵、東めぐみ、木下幸代、黒江ゆり子、実践知の集積を目指して－事例研究法の具体的プロセスを探る－、日本慢性看護学会誌、第 8 巻 2 号、71-76、2014.
⑥黒江ゆり子、時間的経緯を踏まえた看護学における事例研究法の意義に関する論考、看護研究、第 46 巻 2 号、126-134、2013.
⑦黒江ゆり子、「ライフストーリー・インタビューの意義と方法」に関するセミナーを開催して、看護研究、第 46 巻 2 号、204-205、2013.
⑧中岡亜希子、黒江ゆり子、田中結華、パーキンソン病者における病いについての他者への「言いづらさ」、大阪府立大学看護学部紀要、第 19 巻 1 号、63-72、2013.
⑨黒江ゆり子、「病いとともに生きる」を援助することについての論考－クロニックイルネスの視点から－、日本腎不全看護学会誌、第 14 巻 1 号、11-18、2012.
⑩黒江ゆり子、藤澤まこと、慢性の病いと他者への「言いづらさ」－糖尿病におけるライフストーリーインタビューが描きだすもの－、岐阜県立看護大学紀要、第 12 巻 1 号、41-48、2012.

〔学会発表〕（計　6　件）
①黒江ゆり子、寶田穂、田中結華、藤澤まこと、中岡亜希子、森谷利香、市橋恵子、河井伸子、古城門靖子：慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」の事象と先行要件・帰結から導かれる看護のあり方、第 35 回日本看護科学学会学術集会、2015 年 12 月 5 日、広島市文化交流会館３Ｆ十字星（広島県広島市）.
②寶田穂：薬物依存症における他者への「言いづらさ」、第 14 回日本アディクション看護学会学術集会、2015 年 9 月 5 日、創価大学中央教育棟（東京都）.
③黒江ゆり子、長軸的コントロールを支援する知と技～“語り”と“生きる方策の発見”について考える～、第 19 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会会長講演、2014 年 9 月 20 日、長良川国際会議場（岐阜県岐阜市）.
④内田雅子、伊波早苗、小長谷百絵、東めぐみ、木下幸代、黒江ゆり子、実践知の集積を目指して－事例研究法の具体的プロセスを探る－、第 8 回日本慢性看護学会学術集会交流集会、2014 年 7 月 6 日、ホテルマリターレ創世久留米（福岡県福岡市）.
⑤ Yuriko KUROE and Hiroko MORIKAWA, Difficulties in Telling to Others about the Illness in People Living with Diabetes in Cultural Background, American Association of Diabetes Educator (AADE) 13 Annual Meeting, 2013.8.16, Philadelphia, PA, USA,
⑥黒江ゆり子、宝田穂、藤澤まこと、田中結華、中岡亜希子、森谷利香、慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」－看護職者のストーリーから見出される“配慮”について、第 6 回日本慢性看護学会学術集会、2012 年 7 月 1 日、アクトシティ浜松（静岡県浜松市）.

〔図書〕（計　7　件）
①黒江ゆり子、高澤和永、吉岡成人、和田典男、藤澤まこと、普照早苗、白水眞理子、伊

波早苗著、「系統看護学講座 専門分野Ⅱ成人看護学VI内分泌・代謝」第14版第2刷、第6章「患者の看護」、医学書院、321（188-205, 223-281）頁、2016.1.
②安酸史子、鈴木純恵、吉田澄恵、黒江ゆり子他著、「ナーシング・グラフィカ　成人看護学Ⅰ、成人看護学概論」第3版第2刷、第13 章「病みの軌跡」、メディカ出版、284(201-204)頁、2016.1.
③鈴木志津枝、藤田左和、黒江ゆり子、藤澤まこと、他著「成人看護学 慢性期看護論」第3版第3刷、第Ⅱ章「慢性期にある人の特徴と理解」、ヌーヴェルヒロカワ、532(36-52, 81-91)頁、2016.1.
④黒江ゆり子他、「系統看護学講座　専門分野Ⅱ　成人看護学6」第14版第1章「内分泌・代謝の看護を学ぶにあたって」、医学書院、322（6-15）頁、2015.
⑤黒江ゆり子他、「新体系看護学全書：成人看護学概論 成人保健」第5版第1刷、第4章「健康障害を持つ成人に関わる際の基本的な視点」１．健康生活を支えるための基本、２.健康生活を支える人間関係の構築１）人が思いを表現できる環境づくり、２）人が人を支える姿勢、３）「語り」を聴く技術、および４）関わりの技術の発展による多様なインタビュー技法、メヂカルフレンド社、366（172-183）頁、2014.12.
⑥黒江ゆり子他、「新体系看護学全書：成人看護学概論 成人保健」第5版第1刷、第5章「成人の健康状態に応じた看護」、メヂカルフレンド社、366（255-277）頁、2014.12.
⑦黒江ゆり子(研究代表)、慢性の病いにおける他者への『言いづらさ』と看護のあり方を基盤とした看護理論の構築についての研究グループ、「慢性の病いにおける他者への『言いづらさ』と看護のあり方を基盤とした看護理論の構築」、平成24年度～27年度科学研究費補助金「基盤研究(C)」(課題番号：24593223)中間報告書、83頁、2014.4.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
黒江　ゆり子（KUROE, Yuriko）
岐阜県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：40295712

(2)研究分担者
寶田　穂（TAKARADA, Minori）
武庫川女子大学・看護学部・教授
研究者番号：00321133
藤澤　まこと（FUJISAWA, Makoto）
岐阜県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：70336634
田中　結華（TANAKA, Yuka）
摂南大学・看護学部・教授
研究者番号：80236645

(3)連携研究者
古城門　靖子（FURUKIDO, Yasuko）
日本赤十字看護大学・看護学部・講師
研究者番号：40379441
中岡　亜希子（NAKAOKA, Akiko）
大阪府立大学・看護学部・准教授
研究者番号：60353041
河井　伸子（KAWAI, Nobuko）
神戸市看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：50342233
森谷　利香（MORIYA, Rika）
摂南大学・看護学部・講師
研究者番号：20549381

研究協力者
市橋　恵子（ICHIHASHI, Keiko）
現日本バプテスト看護専門学校非常勤講師、元京都南病院地域連携室・看護師